

ケア概念の検討

長谷川美貴子

(2013年10月15日受理)

要約

ケア概念は一般的には「気づかい」「配慮」「世話」「関心」といった意味で用いられている。ケア論をはじめて体系的に、また人間存在論的に展開しているミルトン・メイヤロフによると、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけること」である。

介護・看護職といった専門的対人援助職者は、このメイヤロフのケア概念を最も重要な概念として捉えている。しかし、このケア概念は日常的にも多義的に使われており、またケアする側とケアされる側の認識のずれが存在したままであるため、明確な定義づけがなされていないままである。メイヤロフのケアの本質を再度読み解くことによって、いくつかの視点が明らかになった。それはケアが、ケアする側とケアされる側の人間関係を構築することで成長を目指していく行為であること、両者の認識のずれを調整するためにも専心性が重要であること、自分自身の延長でありながらも独立した存在として相手を認識することの重要性などである。

キーワード ケア、ミルトン・メイヤロフ、配慮、成長、自律

1. はじめに：ケア概念の多義性

現在、「ケア」という言葉は介護や看護といった専門的対人援助職の行為の根幹を担う概念と捉えられている。またケアには世間一般的にもさまざまな「手入れ・世話」といった意味で日常的に用いられている。つまり、「ケア」という言葉は多義的に、しかもさまざまな領域や場面で流通し便利に多用されている。また誰かを「世話」という行為は人間存在存続においてなくてはならないものともいわれ、人類誕生から脈々と行われ続けてきた営みともいえる。だがしかし、ケアという言葉が今日のように脚光を浴びてきたのは、ほぼ1970年以降のことである。従来の言葉では言い尽くせなかった意味が「ケア」という言葉に含まれているのであろうし、また現代社会が欲しているものが「ケア」によって表現されているのかもしれない。他者をケアするという行為はどのような行為であるのか。これまでに

1

も福祉・介護領域においていろいろと議論されてきたテーマではあるが、社会構造が激変し人と人のつながりのあり方も変わり続ける中で、他者のことを気づかい配慮しながらケアするという行為の様相も変化せざるをえない状況といえる。

ケア概念は援助を行う対人関係にだけ適用される言葉ではなく、保育や親子関係、教育活動や芸術活動などにも当てはまり、また動植物や具体物、抽象物との関係においても使われている。このようにさまざまな場面でさまざまな定義づけによって適用されることによって、幅広い概念として発達してきている。そのことによってたとえば、教育の場面で学生指導をする際に、学生の考え方や価値観、多様性を尊重し共感的態度を強めていると、教員の価値観に基づく指導によって変化を企図することはケアの概念から逸脱するのではないかと感じてしまう。だが一方で学生の意見を肯定し受容してばかりでは、よりよい方向へ教え導き成長させることにはつながりにくい。言ってみれば、今の状態を否定するからこそ変化や成長を目指すことができる。否定する場合においても相手に関心を持ち、相手の成長を願っているのである。よってケアの概念には、相手の今の状態を認め肯定していく（否定しない）観点と、相手の今の状態を否定し相手を変化していくことを企図する（肯定しない）観点が同居しており、何がケアであり、何がケアでないのかがわかりにくい状況となっている。

ケアの専門職といわれる介護福祉士や看護師の本質を明らかにするためには、ケア概念における矛盾を解決していき整合性を図ることが最も重要なことといえる。そこで、ケアについて「哲学的ないし人間存在論的分析」¹⁾を行っているミルトン・メイヤロフ（Milton Mayeroff, 1925-1979）の議論を再度概観し、ケアの本質を明確にしていく必要がある。メイヤロフは1965年論文「ケアリングについて」の中で、ケアの特質を①差異の中の同一性、②他者を価値あるものとして経験すること、③他者の成長を援助すること、④関与と受容性、⑤献身、⑥他者の永続性、⑦ケアリングにおける自己実現、⑧忍耐、⑨結果に対する過程の優位、⑩信頼、⑪謙遜、⑫希望、⑬勇気、⑭責任における自由の14項目として掲げている²⁾。今回はケア概念の骨子を明確にすることが目的であるので、メイヤロフがケア論を展開する端緒となっている、父親が子どもをケアする上で重要だと提示する「配慮・気づかい」の意味内容と、メイヤロフのケアの定義の核となる「成長」概念を再吟味することによって、ケア概念が現代社会における人間関係構築の基盤になりえるのかどうかを考察していく。

2. 配慮、気づかいに内在する共感の問題

ケアの意味をまずは語義から捉えると、世話をする（care for）、いたわる（take care of）、気づかう（care about）のように、他者に対する思いやりや配慮、関心を向けるという情意領域の意味内容、他者があるいは何かを世話するという行為領域の意味、または具体的に専門的な援助内容（medical care など）を表わしている。さらにまた、幼子が周囲の人間の気づかいや世話によってその生命や生活が守られていること、その後の生活においても、相手への関心や配慮による関係性の構築が人間存在の存続にとって重要な意味を及ぼすことを考えると、ケアは人間にとってなくてはならないものと考えられる。人間にとって最も根源的

な欲求である「愛」の概念の中にケアが含まれていると論じるエーリッヒ・フロムも、「愛に配慮（care）が含まれていることをいちばんはっきりと示しているのは、子どもに対する母の愛である。もし、ある母親に子どもに対する配慮が欠けているのを見てしまったとしたら、つまり子どもに食べ物あげたり、風呂に入れたり、快適な環境を与えることを怠っているのを見てしまったら、たとえその母親が自分は子どもを愛していると言ったとしても、その言葉を信じることはできないだろう。（中略）愛とは、愛する者の生命と成長を積極的に気にかける（active concern）ことである。この積極的な配慮（active concern）のないところに愛はない」³⁾。子どもに食事を提供したり、風呂に入れて清潔を保ったり、環境を整えるといった配慮や気づかいは、子どもに関心をもって十分に観察し子どもの状態や状況を察することで可能になる。子どもにとって必要であろうことに気づいていくためには、子どもの気持ちに寄り添い共感し受容していく力が必要だと考えられる。「どのような状態なのだろう」「どのように感じているのだろう」「何を思っているのだろう」「何を考えているのだろう」と相手への十分な観察に基づき、相手の状況を推測しながら実践していくことが求められている。

相手を理解していくためには、まずは相手を受けとめ相手を肯定的に捉えていくことができなければならない。一人ひとりの多様な価値観を尊重し認めることができはじめて、相手の気持ちや考えが理解できるようになる。相手を尊重することの実践として存在している「ケア」は、相手を気づかい、配慮する行為であり、相手の考え方を否定せずに、そのままの状態・気持ち・考え方に価値をおき、相手の存在を認め、すべてを受容する姿勢から可能になってくる。「メイヤロフは、ある対象が本質的価値をもつことを経験する（experience）、あるいは感じる（feel）、また、その対象の成長を助けることを求められていることを経験する、感じる」⁴⁾ことを、ケア活動の基盤に据えていると高橋が述べるように、相手の存在そのものを実感として感じ、経験することがケアの根底に流れている。つまり相手を理解するということは、相手の気持ちを感じることができたと実感する体験に基づかれているといえる。実感するということは、自分の中に一旦取り込み、相手をまさに体験することといえる。要するに、自分の身体を介して相手を理解することであるため、自分の身体を介しながら共感し受容していくプロセスといえる。

しかしここには、未だ解決していない問題が存している。それは相手に共感し、相手を理解することで相手を気づかうという行為は、ケアする側の認識に基づく行為であるということである。ケアする側の身体を介して相手を実感し理解したとしても、その理解はどこまでいってもケアする側の認識である。よって、たとえば相手を気づかって言った言葉でも相手を傷つけてしまったり、相手のことを思って配慮した行為が有難迷惑だと言われてしまうことも多々ある。つまり、相手を理解し気づかっていると思って行う「ケア」という行為は、ケアする側が観察した結果から状況を判断し、何が必要であるかを慮り行う行為なのである。そこには認識論的ずれの問題が未だ解決されずに残っているのである。社会通念的に一般化されていると思われている席を譲るといふ他者への配慮行為であっても、時には「私を年寄扱いして」と本気で怒られることもある。母親がわが子に関心をもち世話をする行為も、子

どもへの配慮や気づかいによるが、そうした配慮の内容は「このように育てほしい」という親の価値観に支えられているため、ケアを受ける子どもは管理される立場に立ちやすい。つまり、相手の存在を尊重し愛を基盤にケアする場合であっても、相手のことを気づかう行為でも、それはケアする側の価値基準に基づいたものであるため、ケアする側とケアされる側の認識が常に一致するとは限らないのである。

3. ケアにおける成長概念

ケアする側とケアされる側の認識を一致させるための一つの解答として、ケアされる側の成長ということがある。メイヤロフによると、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけること」⁵⁾である。つまり、いくら相手のことを配慮している、気づかっていると考えている行為であっても、相手が成長しなければ、その行為はケアの定義からは外れることになる。ケアは、相手が自己実現することをたすける行為であり、相手の成長を望む行為といえる。では成長するとはどういうことであろうか。メイヤロフは「私は今まで以上に明確に自己決定することにより、自分自身の経験に基づいた私自身の価値や理想を選択することができ、それによって成長する。(中略)成長することにより、私は自分自身の決定が、もっとしっかりとできるようになるし、その決定に喜んで責任をもつことになる」⁶⁾という。つまり、人間が成長するということは、自分自身の考えを明確にもち、いろいろな状況に遭遇した際に自分で考えていき、自分で判断できる状態といえよう。自分の持っている能力を最大限に発揮して、自分で考え、行動していくようになり「自律」していくことが、人間が成長するということと考えられる。自分で考え行動していくことが出来るということは、自分らしさを表現できるということであり、アイデンティティが確立していくことである。自分を知るということは、自分の能力を知り、自分にできることとできないこと、あるいは自分の考えと他者の考えの一致点や相違点を吟味しながら、自分の考えをさらに深められることともいえる。

メイヤロフは「ケアする時私は、他者を種々の可能性と成長する欲求をもっているものとして身に感じとる」⁷⁾と述べている。つまり、成長する力をもっていると感じた相手に対して、自分が感じたその力を相手も持っていることを信じて関わるのがケアである。そして、相手の潜在能力が十分に引き出されることを企図して、その相手との関係性を築こうとすることではないだろうか。石川も「その人が心身の危機状態から立ち直す回復力、判断や同意を与えることができるようになる潜在的な能力、成熟した人間になっていくという成長力など、広い意味での『可能性』を信じること」⁸⁾が関係構築には重要だと述べている。相手の持っている潜在的な能力を最大限に引き出すためには、相手の可能性を信じていなければ不可能といえる。相手の持っている能力に対して信頼しているので、「私が何とかしなくては」と焦りや不安を感じる必要はない。また、ケアする側の一方的な考えで「こうあるべきだ」と決めつけ強制することでは、相手の自律を妨げることになるので、ケアとはいえない。ケアは相手が望んでいる成長の方向性を知り、それを積極的に認めていくことであり、そのことに

よって相手は安心して自律した行動をとっていくことができる。それは誰にも依存することなく自分の生を生きることであり、それができてはじめて他者との関係性を築くことができ、さらには自分自身との関係性も深まり、より自分を知ることになるであろう。つまり、ケアされる側は自分を受容し親身になって配慮や関心を寄せてくれる他者の存在によって、自分に自信をもち、自己効力感も高まり、自己アイデンティティも確立しうる。

4. 信頼しあうプロセスの重要性

相手を気づかい配慮する行為がケアであるか、ケアでないかは、相手の成長を目指しているかどうかの一つの指標となることが理解できた。さらにメイヤロフによると「相手が成長し、自己実現することをたすけることとしてのケアは、ひとつの過程であり、展開をうちにはらみつつ人に関与するあり方」⁹⁾ だという。つまり、相手が成長するという結果が重要なのではなく、成長に至るまでのプロセスが重要なのではないだろうか。自律した行動に向かい自分で考えていけるように手を差し伸べ、本人の持っている能力が引き出されて成長することを目指していく。たとえば、ケアは「友情や相互の信頼が時とともにその関係を深め、質的に変容することによって現れてくる」¹⁰⁾ ことと似ているという。つまり「成長していく」ということは、一時的なものあるいは簡単に実現するものではなく、時間をかけてゆっくりとお互いに信頼しあうプロセスを経ることが大切であり、両者の関係性が質的に変化することなのである。このように人間関係が熟成するように築かれていく過程の中で、お互いに人間の成長が実現するとメイヤロフは考えているのではないだろうか。「比較的長い過程を経て発展していく他の人格とのかかわり方」¹¹⁾ そのものがケアなのである。つまり、人と人との関わり方それ自体が、人間の成長を促す鍵となっている。

メイヤロフは父親がわが子をケアする例を挙げ、ケアとは子どもが成長し自己実現することを父親がたすける過程の中で、父親と子どもの相互信頼が深まり、成熟した関係へと共に成長する関係のあり方であると述べている。つまり、相手の自律を目指しともに成長する関係性を築くことである。常に相手の成長する力を信じる姿勢をもっているため、「相手を成長させよう」とか「相手を変えよう」と一方的に考えるのではない。しかし、相手の成長を目標にすると「相手を成長させることができる」「相手を変えることができる」といった誤った認識が生まれてしまう可能性も生じてくる。そうした関係性からは強制的な支配-服従関係しか成立しない。そうではなく、「関係性が変わる」「関係性が発展する」「関係性が成長する」ことを期待するのであれば、自分も含まれている関係性の成長であるので、両者は対等な関係となり、そのことによってはじめて人間の成長の可能性が出現してくるのではないだろうか。もう少し、成長概念を具体的に考えてみよう。

人間が成長するということは、「対象がその人以外の誰かをケアできるようになること」だとメイヤロフは述べている。つまり、成長するということを他者との相互関係の中で捉えており、他者との関係性の中でしか、自分の成長はありえないと断言している。相手の成長は、私との関係構築によって可能であり、関係性が構築するということは、私自身の成長も

必要要件となる。ケアとはケアされる側だけの成長を企図した行為ではなく、ケアする側とケアされる側との関係性の成長を企図した行為なのである。ケアが両者の成長をもたらすばかりでなく、もっと幅広い概念であるという主張は、フロムの愛についての捉え方も通じている。フロムは「一人の人をほんとうに愛するとは、すべての人を愛することであり、世界を愛し、生命を愛することである」¹²⁾と述べている。メイヤロフも「私のするケアが十分包括的なものであるならば、このケアは私の生活のあらゆる領域に深くかかわってきて、実りある秩序を提示する」¹³⁾と言う。つまり相手の成長を実現させるようなケアを行うことができるということは、自分自身の成長にもつながっている、その相手との関係性を構築することにとどまらず、私自身の日常的なすべての事象、できごとにおいても実りある対応ができてくるということになる。

相互の信頼が実現し、関係性が築かれるプロセスは、「世界の中であって、“自分の落ち着き場所にいる”ことであり、他の人々をケアし役立つことによって、その人は自身の、生の真の意味を生きている」¹⁴⁾ことを指している。つまり、人間は他者との間に関係性が築かれ、その人をケアすることによって、その誰かとともに存在していることを実感することになる。さまざまな人と関わり合い関係性を構築しながら存在していくことによって、自分自身の認識も深まっていき、自分の生きる意味を見出すことも可能になっていくのだろう。

5. 自分自身の延長であり、独立した存在となる他者

ケアにおいて、また成長していくことにおいては両者との関係性を築くことの重要性が理解できた。人間関係を構築するためには、私も相手を理解し、相手も私を理解することが大切である。まずは相手の多様性を受け入れ、認めていく過程からはじまる。ケアは相手の成長を関係性の調整によって目指していく行為であり、お互いに信頼関係を築くことができるほど相手を理解していくことが重要となる。このように深いレベルでの理解がなければ、二人との関係性が変わることは難しいからである。信頼関係が形成されるということは両者の関係が変化したということであり、その変化はそれぞれの成長に繋がっており、どちらか一方だけが成長するということはありえない。

このような信頼関係を構築するためには、あるいはまた相手の成長を企図するほど相手を理解するためには、具体的にどのような存在になる必要があるだろうか。メイヤロフによると「ケアする人は対象を自分自身の延長 (extension) のように感じとる。がそれは、不健全な依存や寄生の関係ではない。ケアする人にとって対象は独立した存在である」¹⁵⁾という。相手が自分自身の延長でありながら、独立した存在になるということは、一見論理的に矛盾しているように考えられる。このことは、フロムが「愛においては、二人が一人になり、しかも二人であり続けるというパラドックスが生じる」¹⁶⁾と述べていることにも近い。具体例を挙げてみよう。わが子は自分から生まれ出た、自分自身の延長ではあるが、一人の人間として独立し親とは全く異なる人格をもっている。また、画家が描く絵は画家の考えや感覚、感情に基づき、画家の手によって描かれたものであり画家の延長といえるが、描かれた絵は

絵として画家とは異なる存在であり独立しており、画家の予想を超えた感動を人々に与えることも多い。よって描いているうちに、画家の意図せざる結果に仕上がりが、まるで絵が自律的存在のように成長しているようにも見える。

メイヤロフはケアの対象を人には限定しておらず、芸術家と芸術作品の間や、何らかの構想とそれを考えている人間との間のようにいろいろな場面に生じると考えているが、そこにはケアする側の「専心」という共通点があると説明している。たとえば、「単に誰かを好きになるというようなある一つの個別の感情、あるいは、一時的な関係としてのケアには関心はない」¹⁷⁾と述べる。先の具体例のように、父親はわが子の成長を長い時間をかけて専心的にケアしているし、画家も同様に自分を表現するために自分の絵に自分の全精力を傾け、全人生をかけているであろう。つまり、メイヤロフの考えるケアとは一時的な関係性から生じるものではなく、長い時間をかけて作り上げられる親密な関係性から生じるものなのである。そうした親密な関係性から生じる安心感や一体感の感じられる他者との関係によって、人間は自分自身を落ち着いて客観的に見つめ感じることができるのではないだろうか。人間にとって専心的な関わりを受け、ともにいる時間が長いという状況は、精神的な安定を生みやすいと考えられる。

だがしかし、専心によって、固執・執着が起きやすいことも確かである。相手の成長のために専心的に関わることによって、すべてのことを掌握し、成長という成功のために全力を注いでいくといった支配欲やコントロール欲が生じやすいからである。成功させるために専心すればするほど、すべてのことを掌握したいと思う傾向が出やすい。しかし、ケアは相手の持っている能力を十分に引き出し自律することを期待して行う行為であり、ケアする側の欲求を満たすための行為ではない。他者を自分の延長と捉えながらも、「ケアすることは、自分の種々の欲求を満たすために、他人を単に利用するのは正反対のこと」¹⁸⁾であり、相手は独立した存在であることを忘れてはならない。ケアにおいては、相手と自分との間の関係性それ自体の調整が課題となっており、相手の自律を促すこと（成長）を目指しているならば、ケアする側の支配欲やコントロール欲は排除されなければならない。支配欲が生じてしまうのは、相手の自律性を信じていないから、すべてを知り管理しなければならないという感情が発生するためと考えられる。相手を信頼し自律性を認めた関わりができない状態では、自分自身の自己成長も実現しないだろう。メイヤロフは「私は私の生の意味を生きるためにケアに携わっているのではなく、私と補充関係にある対象へのケアを中心に据えた人生を生きること、それ自体が、私が私の生の意味を生きることになるのである」¹⁹⁾と述べている。

メイヤロフはケアの特質として、「ケアは連続性を前提としている。ケアの相手が、絶えず一人また一人と変わるようであれば、ケアは不可能である。（中略）流動性の大きすぎる社会では、人はよりどころがなくなり、自分の共同社会に誠実であることがしだいにむずかしくなっている。私たちはその場合、専心や信頼といった力も、その能力を発揮できる機会を得られない。（中略）相手が変わらないというばかりでなく、変わらないということがケアする人に深く感じとられていなければならないのである」²⁰⁾。近代以前の人と人のつながりは、同じ場所に住み続け、同じ仲間と一生働き続けるといった強固に安定したもの

に支えられていただろうが、常に流れ続け変化し続けている現代社会においては、そうした状況はほとんど不可能となってきている。つまり、連続性や一体感に依拠した人間関係が築きにくくなっており、メイヤロフが考える「ケア」というものは存在しにくい現実の世界が存しているといえよう。だが、個人個人の自己の意味を見出すためには、「ケア」を基盤とした人間関係を構築していくための方法を見出すことが、私たちの福祉（幸福）を考える上でとても重要となってこよう。

6. まとめ：アイデンティティの確立につながるケア概念

現代社会において人間関係は不確かで不安定なものとなっている。信頼できる確かで強固なつながりが築きにくく、互いに互いの援助を期待できない関係しか構築できず、不安を発生しやすい状態である。つまり人間関係におけるバランスを欠いており、そうした関係性のバランスを調整するためにも「ケア」の考え方が重要な意味をもってくると考える。自分自身の延長でありながら独立している他者と信頼関係を築いていくことで、自分の考え方とそれ以外の考え方との違いも理解できるようになり、そのことによって今までの考え方とは異なる新しい考え方をすることも可能になる。自分の考え方は自己の価値観に基づいているので、自分自身の存在をあらわしているもの、自分の人生に意味を与えるものと考えられる。つまり、自分自身の感じ方や考え方を変えるということは、自分の既存概念を根本から覆すことになるが、そのことが真に自分自身が成長することといえる。

ケアが成立している人間関係は、それぞれの単なる願望に基づく一方的な関与のあり方とは異なり、お互いがお互いにお互いの成長を助けている関係である。さらにまた、「一人の人間の生涯の中で考えた場合、ケアすることは、ケアすることを中心として彼の他の諸価値と諸活動を位置づける働きをしている。彼のケアがあらゆるものと関連するがゆえに、その位置づけが総合的な意味をもつ時、彼の生涯には基本的な安定性が生まれる」²¹⁾ともいえる。つまり、ケアすることによって私たちは自分のアイデンティティを確立し、自分がなすべきことが見えてくる。よって、自信をもって自分の行動を決定していくことができるようになり、安定した「自分の落ち着き場所」を確保できるのである。

他者との関係性を築きにくくなっている現代社会であるからこそ、他者と関係を結ぶ上で大切な情愛とか情感をもつケアの論理を学び、実践していくことが必要といえる。特に、援助を必要としている他者を支える介護や看護といった対人援助の現場では、急務の課題といえる。相手は自分自身の延長でありながら、独立した存在として捉え、成長することとは他者をケアできることであるというメイヤロフの定義は、ケア実践の基本原則であることは疑いようがない。ただし、一人の人間を専心的に長い時間をかけ信頼関係を築いていくことが、実際のケア場面で実現可能であるのか。また可能でなければ、これに替わる方法で、相手との信頼関係を築いていく方法があるのかを模索しなければならないだろう。

安心できない不安感の強い現代社会にあって、相手を信頼すると同様に自分自身も信頼することが大切であり、「完璧ではないが“これでよい (good enough)”と認め」²²⁾ることが重

要であろう。そのことによって「私が何のために生きているのか、いったい私は何者なのか、何をしようとしているのか」²³⁾といったことがみえてくる。それがみえてくることによってはじめて自分自身のニーズが明確になり、自律して自己決定が可能になるであろう。完璧ではないが、これでよいと自分を信じ、認めていくことは自己肯定感の高まりにつながっていく。お互いの信頼に裏付けされた関係性の成立によって、それぞれが根本的な肯定感を獲得し、それによってそれぞれの自律がさらに確保されるのであろう。つまり、自律（成長）というものは他との親密な関係性、信頼しあう関係性の中でしか育ちえないものであって、自分以外のことに時間と場を使い専心することによって実現しうるのである。メイヤロフによると、関係性の構築がなければ「私という存在は必ずと萎縮し、制限されてしまう」²⁴⁾のであり、ケアという関わりがなければ「私独自の能力は死に、私は不自由そのもの」²⁵⁾になるのである。自分の存在を確かめることができるような人間関係を築くことによって、自分の存在意義が感じられ、自律した人間へと成長していくと考えられる。今回の議論ではケア概念の意味内容を吟味することによって、人間の成長を促しうる関係性の構築の在り方について明らかになった。だがまだ思考過程のレベルであるので、今後の課題としては介護福祉士や看護師といった専門的対人援助職における実際の場面において、ケアの実践がいかんにして可能になるのかについて検討していきたい。

引用文献

- 1) 品川哲彦『正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版、2007、p.154.
- 2) Mayeroff M. On Caring. 1965, "The International Philosophical Quarterly" vol5, Issue3, Sept. 田村真・向野宣之訳『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版、1987、p.186-210.
- 3) Erich Fromm, "The Art of Loving" Harper & Brothers Publishers, New York, 1956, 鈴木晶訳『愛するということ』紀伊國屋書店、1991、p.48-49.
- 4) 高橋隆雄「メイヤロフ—ケア論への道—」『先端倫理研究』vol7, 2013, p.117.
- 5) Mayeroff M. "On Caring" 1971, Harper & Row, 田村真・向野宣之訳『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版、1987、p.13.
- 6) ミルトン・メイヤロフ 前掲書5) p.29-30.
- 7) ミルトン・メイヤロフ 前掲書5) p.20.
- 8) 石川洋子、「医療におけるケアの双方向性とsupportというあり方について—メイヤロフのケアの概念から」『応用倫理—理論と実践の架橋』vol.5、p.68.
- 9) ミルトン・メイヤロフ 前掲書5) p.14.
- 10) ミルトン・メイヤロフ 前掲書5) p.184.
- 11) ミルトン・メイヤロフ 前掲書5) p.184.
- 12) エーリッヒ・フロム 前掲書3) p.77.
- 13) ミルトン・メイヤロフ 前掲書5) p.112.
- 14) ミルトン・メイヤロフ 前掲書5) p.15.
- 15) ミルトン・メイヤロフ 前掲書5) p.18.
- 16) エーリッヒ・フロム 前掲書3) p.41.

- 17) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.184.
- 18) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.13.
- 19) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.138.
- 20) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.78-79.
- 21) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.15.
- 22) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.149.
- 23) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.154.
- 24) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.167.
- 25) ミルトン・メイヤロフ 前掲書 5) p.168.